

「中国思想の伝道師」を目指して

小野 泰教

本書は、後漢思想を専門とする著者が書き下ろした中国思想史である。近年、中国思想史を扱った書物の刊行は少なくないが、多くの類書が複数の専門家による編著の形をとっているのに対し、本書は一人の著者が執筆した夏王朝から中華人民共和国にいたるまでの思想通史であり、この点はまず大きな特徴と言えよう。さらにユニークなのは、こうした試みへの以下のような動機である。すなわち、日本の大学においていかに中国思想史を講義すればよいのかということである。日本の大学では、特定の時代やテーマを専攻する研究者が全時代にわたる中国思想史を講義しなければならないのが常である。そうしたなかで、自らの専門以外の時代やテーマにも臆さず立ち向かい、

しかもその醍醐味をいかにして学生たちに伝達すればよいのか。例えば本書は十三の章から構成されるが、これは大学の一学期の授業回数を念頭に置いたものであり、本書が大学教育の極めて実践的な立場から執筆されたことを示している。

以上のように著者は、「中国思想の伝道師」(二〇九―二一〇頁)の意気込みを持って、初学者に中国理解を深めてもらうことを目指している。本書評では、著者のこうした目標およびそれがどの程度達成されているかを解説するとともに、いくつかの質問を投げかけることで、その目標のさらなる実現に資することができればと考える。

本書は「はじめに」と「あとがき」を除くと、三部構成になっている。すなわ

井ノ口哲也著
入門 中国思想史



A5判 258頁
勁草書房 [2940円]

ち「第Ⅰ部 古典形成の時代」(第一章 伝説から思想史へ——夏・殷・西周/第二章 掲げる理想、とびかう言説——春秋・戦国/第三章 国家統一のための政治思想——秦・前漢/第四章 出土資料研究の影響)、「第Ⅱ部 古典解釈の時代」(第五章 経学の隆盛と正しさの希求——新・後漢/第六章 新しい人間観と世界観——魏・晋/南北朝/第七章 三教の交渉——隋・唐/第八章 印刷技術と水路交通網の恩恵——北宋・南宋/第九章 朱子学の伝播と変容——元・明/第十章 思想上の鎖国と開国——清/第十一章 學術の分類と目録学)、「第Ⅲ部 古典再評価の時代」(第十二章 儒教のな

い世界をもとめて——中華民国／第十三章 失脚と復活——中華人民共和国）である。

本書を通読してみて感じた特徴は、まずそのカバーする時代の長さにある。夏・殷・西周を思想史研究の対象にしたことの意義（i頁）に加え、二一世紀中国という同時代史をも射程に入れた近現代思想の分析がなされている点も興味深い。

そして本書ではこうした広範囲にわたる各時代の思想状況が、網羅的にかつ整然と叙述されている。例えば、評者の専攻する近代思想の箇所（第十章、第十二章）を見てみると、今文学派の展開、『海国図志』と西洋認識、太平天国、洋務運動、戊戌変法と日本観、社会進化論や国学の流行、辛亥時期の革命思想、新文化運動、マルキシズムの流行、新儒家の登場といった諸点を取りあげられている。

欲を言えば、「宗教」観念の受容や、アナキズム、リベラリズムの流行など、さらに盛り込んでほしい論点が無いわけではないが、著者が目指す「俯瞰的」

で「分かりやすい」（二二〇頁）叙述にはおおむね成功していると言えよう。

次に重要なのは、こうした長い時代をいかに著者なりに整理して把握するかである。評者の見るところ、著者の整理の仕方は二つある。第一に、思想を載せるメディアへの注目、第二に古典の形成↓古典の解釈↓古典の再評価という時代区分である。

第一の点についてまず目を引くのは、出土資料の重要性を論じた第四章と、目錄学の展開を論じた第十一章である。初学者はこれら二つの章を読むことで、中国の思想が書籍や目錄の整備とともに発展してきたことを知ることができよう。とりわけ第四章は、九〇年代から出土資料研究に参与してきた著者が自らの経験を交えつつ解説を行ったもので、大変興味深い。

メディアへの注目は通史全体のモチーフになっている。前漢後期から後漢にかけての書籍整備が詳細に叙述され（五五一六〇頁）、宋代の思想の発展と印刷技

術革新との関係も重視されている（二〇三一一〇四頁）。また、明代における朱子学の変容と王守仁の思想へ到る過程に対し出版文化の停滞が与えた影響も指摘されている（一一八頁）。さらに近現代の部分では、従来思想史概説としてはあまり取りあげられなかった文学・芸術や、近代的教育機関たる大学の歴史について解説がなされているが、これも、思想を多くの人々に伝えるためのメディアに注目した結果ではなからうか。

著者はこれまで、後漢における経学の内容のみならず、当時の経学の学習・教育方法や、経義・経文の正定過程といったいわば経学の制度的なあり方についても研究を重ねてきた。本書では、著者のこうした研究関心が、後漢のみならず全時代に推し及ぼされたものと思われる。思想とメディアの関係というテーマは初学者に対しても充分訴えかけるものであると言えよう。

では第二の古典形成↓古典解釈↓古典再評価という時代区分を見てみよう。自

らの史観に基づいて各時代の性質を見定める時代区分という行為には、研究者の個性が最も表れるものである。本書において著者が採る区分は、前漢までに形成された古典が、新・後漢以降、清にいたるまで解釈されていき、中華民国以降、再評価されたというものである。こうした著者の見方、とりわけ、新・後漢から清までを一つの時代とする見方は、従来の思想通史によく見られる唐宋変革論——士大夫の台頭とその思想に着目して唐と宋との間に画期を置く見方——とは大いに異なり注目される。著者が今後一層この時代区分を精緻化していくことを希望するとともに、いくつかの質問を提起してみた。

著者の言う「古典」とは主に儒家の經典である経書を指しており、著者の念頭にあるのは、以下のような中国思想史の流れであろう。すなわち、前漢後期から後漢にかけて整備された経書が、後の長い時代をかけ解釈されていき、中華民国以後という近現代にいたるまでなお現実

社会に影響を与えている、というものである。

以上の見方に基づけば、経書が整備されその解釈学たる経学がはじめられた前漢後期から後漢は、以後清代にまでいたる中国思想の基礎を定めた時代として最も注目すべき画期となる。そのため本書は、石渠閣会議から鄭玄にいたるまでの経書の整備について詳述しており、ここにも著者の研究成果が生かされているのであるが、評者の印象では、経書の整備がなされたという事実自体は明確に理解できるものの、結局のところなぜこの時期にこうした経書重視が起こってくるのか、その要因が少なくとも本書の叙述からは見えにくかった。この点に関係していると思われるが、学界において現在も論争の絶えない前漢の儒学の官学化（儒教の国教化）と董仲舒の貢献について、著者は福井重雅氏の説を紹介しつつ、董仲舒が儒学官学化の立役者だったというのは史実を反映したものではないと述べるにとどまり、それ以上意見を出していない（三三—三五頁）。さらに本書の前漢

の叙述では董仲舒についてその天人相関論を数行紹介するのみで、また儒家思想全体についても時の有力思想と結びつかないかぎり自らの説を開陳できない環境にあったことを指摘する（三二頁）。著者は自身の博士学位論文の中で、儒教や国教化というのがあくまで研究者の分析概念にすぎず、その存在の立証に労力を傾けすぎることは非生産的だとしており、こうした著者の姿勢が、董仲舒の儒学思想以外に重点を置いた本書のような前漢思想界の多様性の叙述に反映されていると思われる。だが学界の論争を熟知しない初学者であれば、むしろ儒学官学化に関する著者の見解をもう少し詳しく記述してほしい、そのうえで、前漢の多様な思想状況から、なぜ後漢の「儒教一尊体制」（六三頁）が生まれてきたのか、その事実描写のみならず歴史的要因について著者の考えを聞いてみたいと思うのではなかろうか。

ここまで、著者が採用した二つの中国

中国研究所 会員制度のご案内

当研究所は、中国およびアジア諸国との友好を願う立場から、現代中国の政治、経済、社会、文化、歴史を科学的に研究する民間研究機関として、1946年1月に創設されました。以来今日にいたるまで、出版物の編集発行、専門図書館の運営を活動の柱とし、日本における中国の調査・研究の拠点として歴史を重ねてきました。

中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。当研究所の趣旨をご理解の上、入会をご検討いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

60年以上の歴史を有する研究所として、会員の皆様により充実したサービスを提供できるよう努力してまいります。

【研究会員】

会費：9,600円(1年間)

学生会員：5,000円(1年間)

【会員特典】

- ・当研究所発行の学術月刊誌『中国研究月報』の無料配布
 - ・当研究所主催の公開講座等の参加料割引
- 詳細はお問い合わせください。

一般 中国研究所 社団法人

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/fica/>

思想史の整理を見てきた。さらに本書が初学者を対象としていることを考慮すれば、中国思想史の「中国」とは何かという問題もある。中国という観念が歴史的に変遷をたどってきたもので、中国思想を現在の中華人民共和国・台湾の領域に生成したものとするのが妥当ではないことは研究者にとって常識であろう。だが予備知識を持たない初学者が、本書冒頭において中華人民共和国と台湾の版図が記された「本書関連地図」(iii頁)を目にすれば、あたかも現在の中国の領域に、単一に思想史が展開してきたと考えかねないのではないか。この点については、本書五二頁の楚文化の説明にて若干の示唆があるものの、もう少し著者の説明を聞いてみたかった。

以上の通り本書評では、著者の「中国思想の伝道」を紹介し、その達成点について解説を加えてきた。またそれに資するため率直な質問も行ってみたが、あらためて本書は、初学者に對しなるべく多くの情報を生のまま提供しながら、同時に自己の最新の研究成果もさりげなく生かすというバランス感覚を有するもので、大変勉強になった(前述のメディアへの注目や儒学官学化への評価以外にも、後漢の思想家・王充に関する記述などはその一例である)。これから中国思想史の学習を志す読者は、本書の網羅的に整理され

た叙述を手がかりに様々な問いを立てることが可能であろう。そして本書は、もう一種の読者、すなわち大学で講義を担当する中国思想史研究者に對して、「半期または一年で中国思想の通史を講ずる際の一貫した視点」(ii頁)を提供するのみならず、教育者としての自覚をも促そうとする著者の熱意がこもった書なのである。

(おの・やすのり 東京大学)